

銘柄選択の効果を抽出 マーケットの影響を減らす方法とは？

最

高値更新が続く株式市場。米国では、ミーム株人気や企業評価額の急伸を背景に、過熱感を指摘する声も出ている。リスクに備える視点が求められる局面だと言えるかもしれない。

もっとも、市場全体が軟化したとしても、すべての銘柄が下落するわけではない。例えば、日銀ショックと呼ばれた利上げ後の2024年8月の日本株市場。TOPIXが約3%下落した一方で、円高メリットを享受する企業は底堅く推移した。トランプ関税が注目を集めた「解放の日(2025年4月2日)」の翌日の米国株市場においても、生活必需品などのいわゆるディフェンシブ株の中には、逆行して上昇する銘柄が見られた。

こうした銘柄選択の効果を最大化する運用がマーケッ

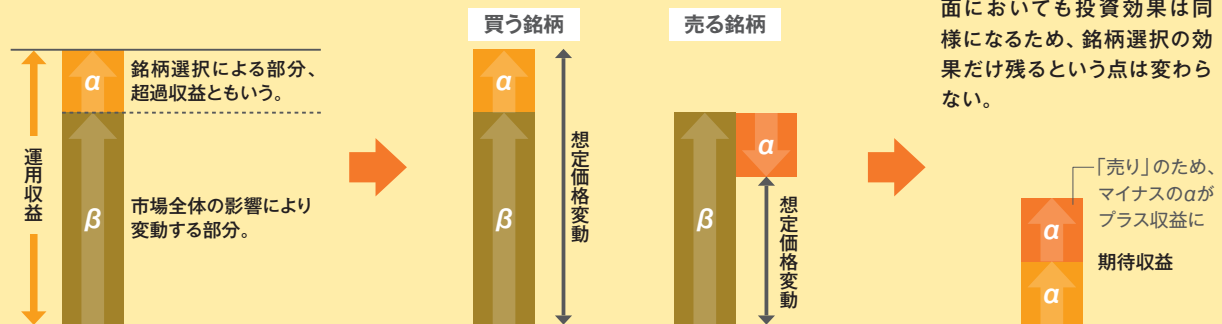
トニュートラルだ。基本は、上昇が予想される銘柄の買いと下落が予想される銘柄の売りを等金額で組み合わせること。銘柄のパフォーマンスを市場要因(β)と銘柄選択要因(α)に分けて考えると、 β は売りと買いで相殺されるため、銘柄選択の効果である α のみが残るという理屈だ。

これは、ロングショートと呼ばれる運用手法の一つ。売りと買いの金額を調整すれば、銘柄選択の効果を抽出しつつ、市場の動きにある程度追随する設計も可能だ。もちろん、銘柄の選択を誤れば、マーケットの影響を排した分だけ損失が際立つ結果となる。市場上昇を取り込めないうえ、選択ミスの影響だけが残るリスクもあるということだ。また、売り買い両建ては一般的な買い持ちよりコスト増要因となる。確かな選択眼を前提とする、プロ向きの運用手法と言える。

M

■ ロングショート運用の考え方 株価上昇局面、マーケットニュートラルとする場合のイメージ

パフォーマンスを分解する



世界株式・クオンツ・ロングショートファンド

(為替ヘッジなし／年1回決算型)(為替ヘッジあり／年1回決算型)
(為替ヘッジなし／年4回決算型)(為替ヘッジあり／年4回決算型)

追加型投信／内外／株式／特殊型(ロング・ショート型)

世界の先進国・地域の上場株式を対象とした
ロングショート運用*を行い、
リターン追求と下落リスク抑制の両立をめざします。

*相対的に割安とみられる銘柄を買い建てて、割高とみられる銘柄を売り建てて、
投資対象市場全体の上昇・下落にかかわらず、投資収益の獲得をめざす運用です。



商品のお申込みにあたっては目論見書等を必ずご確認ください。目論見書等のご請求はお取引店までどうぞ。